THE BOOK REVIEW PRESS

図書新聞

3329号

〒169-0075東京都新宿区高田馬場3－13－1 ノークビル3階
電話03(5937)3918 FAX03(5937)3919
購読料（送料共）1年48週12000円
半年24週6480円 振替00180-2-673481
http://toshoshimbun.jp

定価260円
（本体241円）

発行 武久出版㈱©

2017—12—2㊏

@ワンダー
古書マニア垂涎!! ファン驚喜!!
二十世紀記憶装置
映画／SF／ミステリー／スポーツ／サブカルチャー
御一報買入れ参上
0120-154727
千代田区神田神保町2-5-4
Tel 03-3238-7415

藤城かおる著『唖蟬坊伝』（えにし書房）を読む

セミ一匹、うたえばババア

民衆の、民衆による、民衆のための歌をうたえ

栗原康
KURIHARA Yasushi

▼藤城かおる著『唖蟬坊伝――演歌と社会主義のはざまに』8・1刊、A5判三六〇頁・本体三〇〇〇円・えにし書房

カネだ、カネカネ、カネカネ、カネだ、くそくらえったら死んじまえ

「カネだ、カネカネ、カネカネ、カネだ。カネだ、カネカネ、この世はカネだ」。これはいまから一〇〇年まえ、演歌師の草分け、添田唖蟬坊がつくった「金金節」っていう歌だ。なにをやってもカネ、カネ、カネ。ひとがカネでふるいにかけられる。政治家、カネもち、ご主人さま。税金はらってあたりまえ。たくさんはらえば、エラいひと。はらえなければ、クソである。国民、すなわちノーセイドウブツ。カネがなければ、生きてゆけない。くれるひとはエラいひと。もらうひとはムチうたれ、もらえなければクソである。労働者、すなわちイノチウル。明治時代、やれ開化だ、文明だっていっていたら、そんなクソみたいな世のなかになっていた。だから、唖蟬坊はうたったのだ。カネ、カネ、カネ。政治家、カネもち、ご主人さま。くそくらえったら死んじまえ。くそくらえったら死んじまえ。カネで買われた奴隷だけれど、心はオレのもの。

ダイナマイト、どん

さて、本書はそんな唖蟬坊の評伝である。おもしろい。

唖蟬坊は一八七二年うまれ。神奈川県大磯のひとだ。一八歳のとき、街頭で自由民権運動の壮士が演説を歌にしてうたっていたのをきいて大感動。オレもオレもとやりはじめる。これが演説歌、略して演歌ってよばれるようになったやつだ。もちまえの歌唱力をいかして、自分で歌なんかをつくりながら全国をまわる。でも一九〇四年、三三歳。もうあるていど名のしれた歌い手になっていたころのことだ。当時、浅草に住んでいた唖蟬坊は、渋井のババアってよんでいた近所のおばあさんに、こういわれてショックをうける。てめえら、エラそうに上から目線でうたいやがって、てめえらの歌はカタすぎて、なにいってんのかわかんねえんだよ。くそくらえったら死んじまえ。ガーン。民衆のためにとかいってうたってきたのに、だれもうたえねえんだよっていわれたのだ。クソババア！

しかも、このころ日露戦争がはじまって、自由民権とかいっていた連中が、やれ愛国だ、やれ国威の発揚だみたいなことをいいはじめた。貧乏人が戦地におくられて、バシバシバシバシと死んでいく。それに戦争景気だのなんだのっていって、ひとにぎりの資本家だけがボロもうけして、工場ではたらく貧乏人たちは、給料もかわんないのに、お国のためだからしかたないんだようっていわれて、ひたすらコキつかわれる。血の汗をながすのだ。ああ、わからない、わからない。それでも、みんなでバカ騒ぎ。なにがお国だ、このやろう。ああ、わからない、わからない。ダイナマイト、どん。

唖蟬坊は、気づいちまったわけだ。これまで自由民権の壮士たちは、藩閥政府はいかんぜよ、ひとにぎりのエリートが民衆を支配するのはいかんぜよ、ニッポンを洗濯するぜよっていってきたわけだが、かりにかれらのいっていることがかなったとしても、それまでとたいしてかわりはないんじゃないかと。だって上から目線で、民衆に命令をくだしてくるエリートがふえるだけなんだから。てめえら、だまって税をはらいやがれ、だまってお国のために死んできやがれ、だまって血の汗ながし、シコシコシコシコはたらきやがれっていうだけだろう。文明開化の音がする。洗濯、浄化、オッペケペー。どん！

勝手にしやがれ、ヘイ、ブラザー

ということで、唖蟬坊がつくったのが「ラッパ節」だ。寄席芸人の演目からヒントをもらって、トコトットトっていうラッパの擬音をつかい、それにあわせて、民衆目線で、民衆の生活をうたっていく。「あたしゃよっぽど慌てもの、がま口ひろって喜んで、家に帰ってよくみたら、馬車にひかれたヒキガエル、トコトットト」。ヒャハハ。こんなかんじの歌をうたってみたら、もうバカ売れだ。歌本が売れる、売れる。みんながうたう。すげえいきおいで流行歌になった。

ホレみたことかと、渋井のババアもしたり顔。クソババア！ 国民はこうあるべきだとか、労働者はこうあるべきだとか、上から目線で命令されんのはまっぴらごめんだ。オレはオレ。自分の生きかたは自分できめる。自分の生きかたは自分でうたう。うたえ、うたえ、おまえがうたえ。ラッパをふいてあおりまくれ、唖蟬坊。考えてみれば、歳をくって死にそうなクソババアの域にまでたっしちまえば、

【2面へ……】

藤城かおる著『唖蟬坊伝――演歌と社会主義のはざまに』（えにし書房）を読む

【……1面から】
うしなうものなんてなにひとつない。納税、賃金どうでもいいね。いつでも死ぬ気でやっちまえ。政治家、カネもち、なんぼのもんじゃい。オレ、オレ、オレ。セミ一匹、うたえばババア。トコトットト。

でも、まだまだたりない。唖蟬坊はおもった。貧乏人はクソみたいなあつかいをうけている。コキつかわれて、ふみにじられて、ひとりで泣いている。だから、それをふきとばすような歌じゃなきゃダメなんだ。くそくらえったら死んじまえってさけべなきゃダメなんだ。それが民衆の生活をうたうってことなんだと。で、おもったのだ。これ、社会主義じゃねえ？ それでコンタクトをとったのが社会主義者、堺利彦。あいにいってみたら、超いいひとで、すぐに意気投合した。唖蟬坊が「ラッパ節」を替え歌にして、貧乏人のさけび声を歌にしたいというと、ぜひやろうという。堺からしても、超売れっ子の演歌師がやってきて、社会主義の歌をうたいてえみたいなことをいってきたわけだから、うひょお、こりゃすげえと興奮したことだろう。

堺がなかまから歌詞をあつめ、それをつかって唖蟬坊がうたう。「華族の妾のかんざしにピカピカ光るはなんですえ、ダイヤモンドかちがいます、かわいい百姓の脂汗、トコトットト」。「当世紳士の盃に、ピカピカ光るはなんですえ、シャンパーンかちがいます、かわいい工女の血の涙、トコトットト」。「待合茶屋に夜明かしで、お酒がきめる税のこと、ひとが泣こうがこまろうが、委細かまわずとりたてる、トコトットト」。「名誉々々とおだてあげ、大切なせがれをむざむざと、砲の餌食にだれがした。もとのせがれにして返せ、トコトットト」。一九〇六年、「社会党ラッパ節」の完成だ。

このころ、堺たちは日本社会党ってのを旗揚げしていたから、それにちなんでこのタイトルになった。でも、唖蟬坊は「党」ってことばをイヤがっていたらしい。自由党だろうが、社会党だろうが、これが民衆のただしい生きかたですよ、こうやって生きるんですよ、こうやってうたうんですよっていって、上から指導して、みんなに唱和させるようじゃダメなんだとおもっていたからだ。唖蟬坊本人は、「社会主義ラッパ節」っていうタイトルをつかっていた。民衆にうたっちゃいけないものなんてない、なにをどうたおうがぜんぶ自由だ。勝手にしやがれ、ヘイ、ブラザー。

よお、兄弟！ それで自由になったのかい

だいたい、「ラッパ節」のメロディだって、唖蟬坊が他人のうたをパクってきたものだ。もとはビゼーの戯曲「カルメン」で、それが日本の軍歌、「抜刀隊」のメロディになった。これ、テンションのあがるメロディなのだが、西洋の楽曲をそのまんまあてはめたものなので、ちょっとうたいにくい。じゃあ、それをより庶民的なものにしちまおうってことで、唖蟬坊が「ラッパ節」のメロディをつくったのだ。ようするにこれ、はじめから替え歌なのである。パクりなのだ。だから自分の歌を民衆が好きにうたい、好き勝手に歌詞をかえていったとしても、いっしょにうたいこそすれ、怒るすじあいなんてない。歌は作者ひとりの所有物じゃないのだ。流行、伝染、爆破にラッパ。パクって、パクって、パクりまくれ。コピペ、コピペ、コピペ！

ちょうど、この「社会党ラッパ節」ができたとき、東京では市電運賃の大幅値上げがあって、ガンガン反対運動がおこっていた。そりゃそうだ。電車じゃなきゃかよえないところに、ポンポン工場をぶったてておいて、いざみんながはたらきはじめたら、じゃあ運賃値上げ、よろしくねっていってきたのだから。カネ、カネ、カネ。くそくらえったら死んじまえってことで、唖蟬坊も社会主義者といっしょにデモにでて、歌をうたいまくった。堺利彦も大杉栄も荒畑寒村もいっしょにうたう。きいていたみんなが、われもわれもとうたいだす。それがドンドンひろまって、流行歌になっていった。よお、兄弟！

民衆にひろまればひろまるほど、唖蟬坊っていう作者の固有名は消えていく。社会党もへったくれもない。なんとなく、うっすらとメロディや歌詞をおぼえていた人たちが、好きに勝手に自分のことばでうたいだす。権力者をおちょくって、ゲラゲラわらって、またうたう。そうこうしているうちに、替え歌に替え歌をかさね、もはや原型をとどめていないかもしれない。でもそれでもかまわない。というか、そうじゃなきゃダメなのだ。これまで、よき国民であれ、よき労働者であれ、よきノーセイドウブツであれっていわれ、上からの命令にしたがうだけだった民衆が、とつぜん反旗をひるがえす。いうことなんてききやしないね。おら、うたいてえ。

権力者にツバをはきかけて、自分のことばで自分のことをうたいだす。党も作者も関係ない。うたいつぎ、うたいつぎ、その歌をだれのものでもない匿名のなにかに変えていく。きっとうたっている本人も、それまでの自分の殻をかちわって、よき国民でも、よき労働者でも、よき党員でもなんでもない、なんにもしばられない、何者かになっていることだろう。マジで自由。しかも、なんかわかんないけど、うたっていると、おんなじことを考えているクソみたいな連中が、ぜったいに、そこかしこにいるってことがわかってくる。しりもしないのにね。よお、兄弟！ こういうのをフォーク（Volk）っていってもいいだろうか。民衆だ。民衆の、民衆による、民衆のための歌をうたえ。

さて、そろそろまとめよう。一九〇六年、東京市電値上げ反対デモは、大暴動に発展した。数千人の群衆が東京市役所を襲撃し、投石につぐ投石、そしてツルハシをつかって建物をぶちこわした。考えてみりゃあ、暴徒ってのはすごいもんで、それまでの自分なんてぶちぬいちまっているわけだ。納税も賃金も関係ないね。なにをいわれても、でてくることばは、カネはらわんぞ。もはやなにものでもない、匿名のなにかになっちまっている。フォークだ。あとはアォアォアォとおたけびをあげ、まだみぬなかまをよびおこすだけだ。よお、兄弟！ そういう意味じゃ、唖蟬坊は暴動の歌をうたっていたといってもいいだろう。本書はこのへんのくだりがむちゃくちゃくわしい。ぜひ、ご一読いただきたい。演歌とはなにか。洗濯、浄化、文明開化。東京、ブタ箱、五輪自由。ああ、わからない、わからない。オッペケペッポーペッポッポー。それで自由になったのかい。それで自由になったのかよ。セミ一匹、うたえばババア。トコトットト。

（アナキズム研究）